救済の潮騒

死にたくない、と、とある男は死ぬ恐怖に叫んだ。
死んでください、と、とある男は殺す恐怖に震えた。
とある男は、彼らの言葉を聞くこともないまま、交差した恐怖の結末だけを受け取った。
それが、恐怖に泣くとある女が救われた時の、とある顛末。

「――俺はな、ずっと後悔してきた！」

ああ、それが、答えだったのだ。

◆

あの時、どうすればよかったのか。
（……未だに、俺は、わかってない）
夕食を終えた後の皿を洗いながら、修太郎はまた同じことに思考を馳せた。単純な作業をしていると思考が逸れるのは人の常で、手を動かしながらも彼の意識はもはや、泡に包まれるスポンジと皿にはない。
あの日のことを考えるのは、もう何度目かわからなかった。あれから一月が経って、百合の存在が日常へなり始めていると言うのに、彼は未だ、あの日のことを思い出すのである。
あの日、玄奘があの男を殺した日、自分は手足を失った百合を背負って、ただ、待つことしかできなかった。震える百合を背負って、ただ、待つことしか。あの時、あの部屋の中で玄奘とあの男がどんな言葉を交わして、何を考えたのか、修太郎は少しも知らない。壁と扉の向こうから漏れ聞こえるのは獣じみた咆哮のようなものばかりで、彼はまともに聞き取ることができなかったのだ。無論、玄奘に訊けばわかるだろう。穣を殺したのは彼で、彼の性格上、会話もせずに相手を殺してしまうとは思えない。たとえ理性で押し留めようとしても、喋ってしまうのに違いなかった。だが、彼は玄奘にそれを訊いたことはない。訊いても教えてもらえないだろうし、そもそも、修太郎はそれを玄奘に訊くことを是としないからだ。それは彼の傷口を抉る行為に他ならないと彼は知っている。
だが、それが――玄奘に、あの日あの男との間に何があったのかと訊かないことが、本当に正しいことなのか、今の修太郎にはもうわからなかった。
玄奘はあの事件以来、明らかに衰弱していた。本人はいつもと同じ振る舞いをしているつ

もりであるらしいが、修太郎のみならず、龍桜や真耶美にもわかるくらいに、彼は日に日にやつれていた。眠れていないのだろうと明らかにわかる顔で仕事へ行く時もあった。事故を起こさないか、ハラハラしてたまらなかった。修太郎の声に驚いている時すらあった、目を見開き、地獄の悪鬼に捕まえられた亡者のような顔をして、声をかけた修太郎の姿を見るのだった。

おかしいのは玄奘だけではない、百合も同様だ。おかしいというよりも、いつも憔悴した顔をして、少しも、そう、少しも、彼女は、幸せそうな顔をしていない。疲れ果てた、どこにも居場所のない、捨てられた子供のような顔で、いつも過ごしている。その彼女に、やはり、修太郎はどう声をかければいいのかわからないでいるのだった。

……穣を、あの狂った男を殺したことは、間違いだったのかもしれない。

修太郎は、最近、特にそう思う。だって、玄奘も百合も、ちっとも、あの地獄から救われたなんて思えない姿をしているじゃないか。まだ二人して地獄の底で泣き喘いでいるような、そんな姿で、日々を過ごしている。それが修太郎にはたまらない。あの日、百合を背負って待っていた時から時間が止まっているのかもしれないとすら思えるのだ。

自分が玄奘に代わって、殺してやるべきだったのではないだろうか。そんなことすら考えた。彼が一番年長だからとか――男だからとか――あの場において人を殺せたのが実質数人もいなかっただとか――百合を引き取ろうと決めていたからとか――そんなことは、今の彼を見れば、ひどく些細なことであるように思えた。こう言えば玄奘は怒るだろうが、それらは、決して、穣を殺さなければいけない義務を発生させるようなものではなかったと修太郎は思うのだ。きっとそれらは、誰かに押し付けてしまったって別段問題ないような些事に過ぎなかった。

（俺は、後悔してる）

頭の中で、修太郎はその言葉を噛みしめる。あの日のことを後悔している、その自分を、自覚していた。毎日毎晩、彼は、『玄奘に穣を殺させてしまったこと』を悔やんでやまないのだ。穣が死んだかどうかではない、その直接の原因を玄奘に背負わせてしまったこと、それを修太郎は悔やんでいる。

一体、誰が救われたってんだ。修太郎は無意識に、皿を洗う手に力を籠めていた。

元凶である穣は死んだ。

彼を殺した玄奘も、殺すよう頼んだ百合も、やつれている。

修太郎は後悔している。

龍桜と真耶美はそれを見て心労を抱え始めている。

確かにあの日、自分たちは、救おうとあの家へ赴いたはずなのに、結果はこれだ。百合の肉体は、確かに解放された。もう二度と、彼女が肉体的に苦しむことはないだろう。だが、それが幸福かと言われれば断じて否だと修太郎は言う。

結局、誰かを助けるなんて、自分たちには無理なことだったのだろうか。そんなことも思う。今まで、自分たちは色々な事件を解決してきた。誰かを助けてきた。そのはずだった。ただの一回も蹉跌がなかったとは言わない。失敗したこともある。あの、娘のために殺人を犯し続けていたバイヤーの男は、修太郎の目の前で自刃した。誰もそれを止めることはできず、彼は死んだ。あの時も、ひどく後悔したように思う。

だが、これは、それとはまた違う、痛みで、後悔だ。

修太郎は、自分の信じた正義を貫けるほど、若くない。

かと言って、愛のままに生きられるほど、大人でもない。

だから自分は後悔しているのだろうか、と修太郎は思った。自分は、貫く正義も、深い愛も持ち合わせてない。ただ拳を真っ直ぐに突き出すことしか出来ないような男だ。そんな自分だからこそ、こんなにも後悔しているのだろうか。

救いたかったのだ。

救って。

救ってやりたかった。

だと言うのに――

「……あの」

「うぉっ!?」

急に背後から声をかけられて、修太郎は皿を取り落としかけた。慌てて掴み直し、胸を撫で下ろす。見れば、落としかけた皿は、最近百合のために買った皿だった。割ってしまわなくて良かった、と修太郎は思う。

「す、すみません……！」

「大丈夫っすよ」

罰を恐れるように震えて俯く百合に、修太郎は焦って笑いかける。なぜだろう、傷などとっくの昔に治っているというのに、百合の姿はいつまでも、あの風呂場で手足を失って倒れていたもののように思えて仕方がなかった。

「なんスか？」

「あ、あの、洗い物を……手伝いたくて……」

「いいっすよ、百合さんは座っててください。それに、もうすぐ終わるんで」

「そ、そうですか……」

しゅんと頭を垂れ、伏せられた目の長い睫毛がよく見える百合の姿に、修太郎は罪悪感を覚える。罪悪感。そうだ、と彼は思った。罪悪感だ。自分は、玄奘と百合に対して、あれ以来ずっと、罪悪感を覚えているのだ。

「あっ、すんません百合さん、ちょっと待ってください」

落ち込んだ様子で帰ろうとする百合を、修太郎は思わず呼びとめていた。百合が振り向い

て、無言で首を傾げる。
「あっと……洗い終わったやつ、拭いて、片付けていってもらっていいっすか？」
言いながら布巾を差し出すと、ぱぁっと、百合の顔が、僅かに明るくなった。仕事を言いつけられることが嬉しくてたまらないと言った風情で彼女は布巾を受け取り、濡れた状態で水切りラックに置かれていた食器を手に取る。
……仕事なんかしなくたって、何もしねえってのに。そんなことを修太郎は思った。
そのまましばらく、二人は無言で、ただ水の音だけが響いていた。ざあざあと、それは雨の音にも似て、二人の間に流れる。
その音を遮って口を開いたのは、意外なことに、百合であった。
「……修太郎さん」
「なんスか？」
率直に言って、驚いた。まさか、彼女が積極的に口を開くとは思わなかったのである。それを表に出さないように気を付けつつ、修太郎は最後の皿を手に取った。
「皆さんは……幸せでしたか？」
「……幸せっすよ」
「そう、ですか」
百合は小さくそう呟いて、どこか遠くを見るような瞳をすると、再び「そう……ですよね」と、その形のいい唇を動かす。それは己に言い聞かせているようで、そこに籠った仄暗い何かを、察さずにはいられなかった。
——百合さんは、と、問わなかったのは、その答えを聞くのが恐ろしかったからだろうか。わからない、そうだったのかもしれないし、そうでなかったのかもしれない。理由はわからない。それに、結局、理由などどうでもよかった。

なぜなら、その翌朝に百合は消えたのだから。

だが——それは、彼にとって、一筋の光明をもたらすものだった。
たとえ、そこに激しい痛みが伴ったとしても。

◆

「それでも、私は、私たちは、君を愛し続けるよ。たとえ君がどんなことをしたって、何者であったって、私たちは君を嫌いにならない。それを忘れないで欲しい。たとえ君がこの世の誰より酷い悪人だったとしても、たとえ君が、『豊山百合』でなかったとしても——
それでも、私たちは、『君』を愛している」

◆

玄奘の言葉を聞きながら、そうか、と、修太郎は頭の中で呟いた。愛し続ける。そうだ。愛し続けると、確かに彼は言ったのだ。

そうか――そうだった。

何を難しいことを考えていたのだろう。

自分たちは、少なくとも自分は、お世辞にも器用な人間じゃなかったじゃないか。

自分で言ったんじゃあないか、自分はただ、拳を真っ直ぐに突き出すことしか出来ないような男だと。

救えなかっただとか、幸せにできなかっただとか。

何言ってんだ。

何、言ってたんだ。

「――なんやあ、めんどくさそうなことになっとるなあ」

百合の傍に停まった赤いスポーツカーから降りてきた外国人が、そう面倒くさそうに言って、玄奘と少し話をしてから――

「あーわかったわかった、面倒は嫌いやねん、いくら渡せばいい？　それだけ言ったって。あの男と同じくらいの額でええ？　その嬢ちゃんの飼い主するくらいなんやし、アレと同類なんやろ？」

――考えるより先に、体が動いていた。勢いよく右足を踏み切って、飛び蹴りを褐色肌の男へ向かって繰り出す。男はそれを簡単に避けると、淀んだ目で修太郎を見た。玄奘が龍桜と一体化して、マジのバケモンやないか、と、男が顔を歪ませる。バケモンね、と修太郎は笑った。百合を連れて逃げようとする男の腕を蹴り上げて、玄奘へと発砲した男の仲間に腸を煮やしながら、彼の射程範囲へ男たちが入るようひきつける。

「――俺はな、ずっと後悔してきた！」

男の左腹部めがけてミドルキックを放ち、防がれて崩れた体勢を即座に立て直すと、引き金を引こうとした男の銃を、足先で蹴り飛ばす。思ったよりも遠くへ飛んだ銃を視界の端で捉えながら、玄奘を撃とうとする他の三人へ飛びかかると、手近にいた一人の腕を捻り上げて銃を落とさせ、そのまま他二人に体ごとぶつかり銃の軌道をずらす。それを見た男が、何語かわからない言葉で、何かを叫んだ。それは悲痛で怒りに満ちた、感情の爆発だった。

だがそれがどうだというのだ――修太郎だって、きっと、爆発している。

「兄貴が、あいつを殺したのは本当に良かったのかって、本当にそれで正しかったのかって、百合は救われたのかって、本当に幸せになるのかって――ずっとそんなことばかり考えてたんだ！」

修太郎は三人が起き上がって来ないうちに男に肉薄し、胸ぐらを掴みあげる。
ああ、そうだ。
「けどな、そんなのは違ったんだ――違ったんだよ」
あれで本当に良かったのかなんて、知らない。
正しかったかどうかなんて、知らない。
救われたかどうかなんて、わからない。
幸せになるのかなんて――そんなもの、わかるわけがない。
当たり前だ。
たった一回で、何かが劇的に変わるわけがねえだろうが。そんな上等な人間だったのかよ、俺ってやつは。ちげえだろ、俺はそんな器用なヤツじゃなかったはずだろ。
（それでも、私は、私たちは――）
ばかやろう、俺は何を悩んでたんだ。
救われてねえなら、百合が救われるまで、救い続けてやればいいだろうが。
兄貴が立てなくなったら、立てるようになるまで、支え続けたらいいだろうが。
修太郎は、男へ向かって拳を振り上げる。立ち向かい続けてやればいいんだろうが。どうせ真っ直ぐに拳を突き出すことしかできないなら、何度でも、何十回でも、何百回でも！

ああ――それが、それこそが、答えだったのだ。

「これだけは礼を言っておいてやる、テメエのおかげで、俺は答えを見つけられた」
そう吐き捨ててから、振り上げた拳を振り下ろそうとして、修太郎は視界で玄奘が弓を構えるのを見た。その姿に、男を離して跳びずさる。そんな修太郎に何かを察したのか、男も咄嗟に後ろに下がるのが見えた。
次の瞬間、濁流が修太郎と男の間を走り抜けていき――

◆

「――百合さんは、今、幸せっすか？」
洗い物をしている修太郎の傍へ、家事に興味を持ち始めた子供のような足取りでやってきた百合へ、彼は開口一番そう言った。百合は質問の意図がわからなかったようで、首を少しだけ傾げる。だがそれでも彼女は、殆ど即答に近い形で、答えたのだった。
「幸せです」
その答えに、修太郎はへらり、と笑顔を浮かべた。ひどく満足な気分だった、理由は、もちろん、わかっている。百合はそんな彼に不思議そうな顔をしてから、「お皿、拭きます」と

布巾を手に取ったのだった。

後日、百合を押し倒した玄奘の姿を見て「あ、俺の出した答えやっぱ間違ってたかも」と思ったのは、また別の話。